

第7回
だい かい

日本語の教え方
に ほんご おし かた

伊呂波
いろは

音声
おん せい

日本語国際センター専任講師 磯村一弘
に ほんご こくさい センにんこうし いそむら かずひろ

海外で活躍している日本語教師のみなさんから、よく「日本語教授法を知りたい」「すぐに使える授業活動を提供してもらいたい」という要望をいただきます。このコーナーでは、「コースデザイン」や「読解」「会話」「評価」などの基本的な教授理論、教授知識を解説します。日本語教授法に関する基礎固め、知識の再点検にお役立てください。

日本語を外国語として勉強している皆さんは、「日本人と同じような発音で話したい」「できるだけきれいで自然な発音で話したい」と考えたことがあるかもしれません。では、「きれいで自然な発音」にするには、どのようにすればよいのでしょうか？

発音には、母音や子音の作り方、音の長さ、強さ、高さなど、いろいろな要素が関わっていますが、1つ1つの音の発音よりも、文全体の声の高さの変化が自然であるほうが、「きれいで自然」な発音に聞こえると言われています。

この「文全体の声の高さの変化」のことを「イントネーション」と呼びます。今回は、日本語の音声の中でも、文のイントネーションがどのようになっていて、できるだけ自然な発音にするにはどうすればいいかを見ていきましょう。

1. イントネーションの「ヤマ」

はじめに、単語をばらばらに発音したとき (A) と、文になったとき (B) の発音をくらべてみましょう。

(A) あかい さかな います しろい さかな います

(B) あかいさかながいます。 しろいさかなもいます。

「」はアクセント核 (アクセントのさがり目)

単語だけを発音したときは、それぞれの単語の中で、高い低い変化があります。これに対して、文になったときの発音では、文全体で平らな、なだらかな高さの変化になります。

(A) あかい / さかな / います / しろい / さかな / います

(B) あかい さかなが います。

しろい さかなも います。

このように、日本語の文のイントネーションは、全体的に平らな山の形になっています。このまとまりを「イントネーションのヤマ」と呼びます。

2. アクセントとヤマの形

それでは、イントネーションのヤマの形はどのように決められるのでしょうか。つぎの文を、アクセントに気をつけながら、くらべてみてください。

- (1) よこはまに すんでいます。
- (2) よこはまではたらいしています。
- (3) きたうらわに すんでいます。
- (4) きたうらわではたらいしています。
- (5) せんだいに すんでいます。
- (6) せんだいではたらいしています。

全体的に、1つの文が、1つのなだらかな「ヤマ」で発音されているのがわかります。このとき、ヤマの形は単語のアクセントによって決められています。アクセント核の下がり目がないときは、イントネーションはずっと高いままで。アクセント核の下がり目があったら、そこで低くなって、あとは低いままで。

イントネーションのヤマの形がどのように決まるかは、つぎのような規則にまとめることができます。

《イントネーションのヤマの形の規則》

- ・文の最初(さいしよ)は低(てい)→高(こう)
- (ただし、いちばん最初の拍(はく)にアクセント核があるときは、高(こう)から始(はじ)まる)
- ・アクセントの核(かく)があるまで下(さ)がらない
- ・最初のアクセントの核(かく)で下(さ)がる (単語(たんご)のアクセントはヤマの形(かたち)を決(き)める)

- ・2つ目の核からは、そのたびに少しだけ下がる
- ・「ヤマ」の中では、一度下がったら、上がらない

日本語の文を自然なイントネーションで発音しようとする場合、このように、できるだけならかな発音になるよう気をつけることが大切です。

また、文のイントネーションには、単語のアクセントがとても大切だと言うことがわかるとおもいます。日本語のアクセントは、核があるかないか、あるとしたらどこにあるかが単語ごとに決まっています、見ただけではわからない性質のものなので、外国人は覚える必要があります。単語のアクセントがわからなければ、文のイントネーションを自然に発音することはできません。アクセントをあまり勉強してこなかった人は、これからアクセントにも気をつけるようにしてみましょう。

3. 文のフォーカスとヤマの数

つぎの文をくらべてみてください。ヤマの数はどのように違いますか？

- (1) きょうとへいきます。
- (2) きょうとへはいきません。

上の「京都へ行きます」では、これまで見た文と同じように、1つのヤマだけでした。しかし、下の「京都へは行きません」では、「京都へは」と「行きません」の2つの部分に別々のヤマがあるので、文全体では2つのヤマになっています。

日本語では、相手に伝えたい新しい情報（これを「フォーカス」と言います）があるとき、そこから新しくヤマを始めることによって、それを表します。そのため、文の途中にフォーカスがあるときは、そこでヤマが新しく作られ、ヤマの数が増えることになります。

「京都へ行きます」では、相手に伝えたいのは「京都へ」と考えられます。これに対して、「京都へは行きません」では「京都へは」の部分よりも「行きません」の部分のほうが、相手に伝えたい情報だと考えられます。そのため、この部分にフォーカスが置かれ、ヤマが新しく作られるので、ヤマの数が増えます。

このことをまとめると、次のような規則になります。

《イントネーションのヤマの数の規則》

- ・基本的には、1つの文には1つのヤマ
- ・文の途中にフォーカスがあるとき
→そこから新しくヤマを始め、ヤマの数が増える

例えば前に見た「仙台に住んでいます」という文も、「住んでいます」の部分にフォーカスを置きたいとき（例えば、旅行者ではなく、住んでいます、と言いたいときなど）は、この部分でヤマを新しく始めて強調する

こともできます。

どこに住んでいるんですか？

—ぜんだいに すんでいます。

仙台にはよくいらっしゃいますか？

—いえ、ぜんだいに すんでいます。

4. 文末のイントネーション

最後に、文の終わりの部分について見てみましょう。

どこにいきますか？ カレーやにしますか？

—あそこは きょう やすみですよ。

これらの文では、文末で声が高くなっています。日本語では、質問したり、確認したりするときなどは、文の最後で上昇調になります。

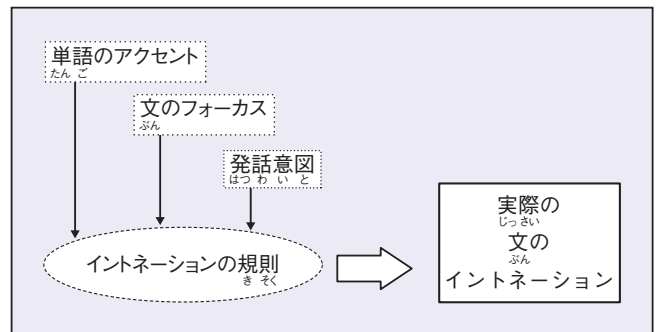
《文末イントネーションの規則》

質問、確認など、相手の答えや反応を期待するとき

→文のいちばん最後の拍で上昇する

自然な日本語で話せるようになるためには、自分が前に練習した文だけではなく、自分で考えた新しい文も、自然なイントネーションで発音できるようになることが目標だといえます。

以上の「規則」を覚えていれば、あとは単語のアクセントがわかれば、文の意味を考えて、新しい文でも自然なイントネーションで発音することができるでしょう。



参考文献

- 磯村一弘 (in print) 『国際交流基金日本語教授法シリーズ2 音声を教える』 ひつじ書房
- 音声文法研究会 [編] (1997-2004) 『文法と音声』 I～IV、くろしお出版
- 河野俊之、中田真知子、築地伸美、松崎寛 (2004) 『1日10分の発音練習』 くろしお出版
- 杉藤美代子 [監修] (1997) 『日本語音声 [2] アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』 三省堂
- 田中真一、窪田晴夫 (1999) 『日本語の発音練習—理論と演習』 くろしお出版
- 戸田貴子 (2004) 『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』 スリーエーネットワーク